



2005年7月発行

まことの葡萄の木とその枝

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」

(ヨハネによる福音書 15章 5節)

主イエスは、「わたしは“まことの”ぶどうの木」、とわざわざ“まことの”と言う言葉を加えられました。それは、“いつもの”ぶどうの木、と言うものがあつたからです。それに対して、「わたしこそが“まことの”ぶどうの木なのだ」、と言われたのです。旧約の時代、神の民イスラエルは、ぶどうの木に喩えられました。主なる神は、彼らが良い実を結ぶことを期待されました。しかし、結んだのは酸っぱい実でしかありませんでした(イザヤ 5:1-7 参照)。この偽りのぶどうの木に替えて、主なる神は、イエス・キリストを“まことのぶどうの木”として世に送り、弟子たちをその枝として此れに繋げ、良き実を結ばせようとなされたのです。

此のぶどうの木の所有者は父なる神です。しかも、不在地主ではなく、自ら育てる農夫でもあられます。父なる神は、親が我が子を育てるように、このぶどうの木を慈しんでお育てになります。しかし、どんなに愛情を注いでも、現実に実を結ばぬ枝はあるのです。それは父が取り除かれる、つまり剪定されると言われます。此れは聞き方によっては、恐ろしい裁きの言葉になりかねません。でも、そうではないのです。例えばイスカリオテのユダの場合を考えてみましょう。ユダは、実を結ばぬからと言って、神が彼を見限り、切り捨てたのではありません。むしろ、事實は反対で、ユダの方がイエスを見限って去って行ったのです。此れを剪定に喩えたのです。しかし実際は、万事を益に変えてくださる神が、此処でも、ユダの反逆や離脱をも、良きに変えてくださったということなのです。

キリストと弟子たちの関係は、ぶどうの木

とその枝の關係に喩えられるとは言いましても、本來的にそうだったわけではなく、接木されることによって、ようやくキリストと一つにされたので、元々はそんなことは望みようもなかったのです。キリストの言葉、即ち十字架の言葉を受け入れ、罪の赦しに与ることによって、清められ、その印である洗礼を通して、キリストと一つにされるのです。その關係は、幹と枝の關係に喩えられる程に、密なのですが、元々は別々のものが、一つにされたのですから、本当に一体化するまでは、油断が出来ません。外側は繋がっているようでも、内側は依然として離れたまま、と言うことも起り得るのです。だから主イエスは、「わたしにつながっていなさい」、と繰り返しておっしゃるのです。此処で“つながる”と訳されているギリシャ語の“メノー”と言う言葉は、新約聖書中約半分が、ヨハネ文書の中に集中して出て来るほどに、ヨハネによる福音書では、特に重要な言葉なのです。それは、「キリストの中に宿る」、「キリストの中に留まる」、と言うことで、全存在がすっぽりとキリストの中に入ることを意味します。信仰生活に於いて、聖日に礼拝に集うのも、繰り返し聖餐に与るのも、信仰の仲間と祈りを共にするのも、すべては、「キリストの中に宿る」、「キリストの中に留まる」ためなのです。

主イエスは、「わたしにつながっていなさい」、とは命じられますが、「豊かな実を結びなさい」、とは命じられません。しかし、わたしに繋がってさえいれば、あなたは豊かな実を結ぶ。確かにそうなる。そうなる以外にはあり得ない、と言ってくるのです。

此処で注意すべきは、豊かな実を結ぶとは、此の世で成功を収める、と言うようなことではなく、父なる神の栄光を現わす者となるということです。カルヴァンは言いました。「私たちが、キリストの外にいる限り、神に喜ばれるどんな良い実りも、もたらすことはない」と。キリストに繋がっているか否か、一切は此れにかかっているのです。牧師 三輪恭嗣

(2005年6月5日の礼拝説教より)